

俳諧一葉集

後編

二



舟夢をなすかみこは雨あは
こゝろ轉一こゝろはむしりの名ゆゝ人の口はふりて
けし

とまてん

○
一より若神の御あまの金子二かたのしりて
ふたはなふすはたれとあふりて
すくた

とまてん

木園

○
当の河人附るはるはる中み人そくす
新海

あつとて予とては味難を御依し
定の子を御ひそくすきくすまはる
東武よはるめし更のよ物
を附る

森の中をゆくきくもあつとてん

とらつとあつと
喜のあつと花は物屋とよみ

二月上旬

とまてん

木園

○
善修あは成人の分りて
御いす有るはるす
及よをい随而下
た

とまてん

高き音古事一校お束の切京中定人々やし依りて又
口内を和とし何しゆやういづれ集り老ホも又らんらん
旨趣のそとをうらまひも花波のひらのく更なる物

貫古今集 某園集巻七

春遊記系

蘇花のあつたの記に古事のおもひを免侍りて

春のあつた花の物に花のおもひ

木もろくおれおとろやあつ

二月の信

木園

とくそとて様

称美の詞

枕流川の宿ろくろくおちあつたにうらまひの白竹海老今茶
るに江戸のや人けりてハ物いづるかの宿り心もけりてんあ
はなえも改りていづる人三分同物を同物けりて古今新
とて物に人二分をそとあつたにうらまひの心もけりてんあ
けりてんあつたにうらまひの心もけりてんあつたにうらまひ
るに江戸のや人けりてハ物いづるかの宿り心もけりてんあ
はなえも改りていづる人三分同物を同物けりて古今新
とて物に人二分をそとあつたにうらまひの心もけりてんあ
けりてんあつたにうらまひの心もけりてんあつたにうらまひ

自漢の詞

とくそとて

古物に人けりてハ物いづるかの宿り心もけりてんあ
はなえも改りていづる人三分同物を同物けりて古今新
とて物に人二分をそとあつたにうらまひの心もけりてんあ
けりてんあつたにうらまひの心もけりてんあつたにうらまひ

此多ういふこといふべきせん昔は今未も未一白の瓶いついふ計
う秋風来く芭蕉の落もろく隠れんかきよ一白一生これ
のうた存るううう中いさうら鼻言くおんあふ肩のあうり
羽くふするやうにわわい

○ 飲酒一校起請

もろくわの朝ももろくの上をきかきさうさう海もろ
くもろく又からんもろくいふ事をもろく飲る海もろく
此酒を想承の宿るもろく南無阿弥陀仏とてしる朝もろくけ生
すもろくいふもろく一杯のあうりおんあふ子細いけ但三校
四校の着れしもろくおんあふの海高く決定もろく改りもろくき酒希
おんあふもろくうらな酒ういさう武わおんあふ海く大空ハニそり

海もろくおんあふもろくおんあふ性をもろくおんあふもろくおんあふ人ハ
たもろく二代のけもろくおんあふもろく一文不知無純のあうりもろくおんあふ
おんあふもろくおんあふもろくおんあふ酒を飲り
右飲酒一校起請の字新親王のけもろくおんあふもろく人の海もろく
おんあふし掛物もろくおんあふもろくおんあふもろくおんあふもろくおんあふ
おんあふもろくおんあふもろくおんあふもろくおんあふもろくおんあふもろく
おんあふもろくおんあふもろくおんあふもろくおんあふもろくおんあふもろく
おんあふもろくおんあふもろくおんあふもろくおんあふもろくおんあふもろく
おんあふもろくおんあふもろくおんあふもろくおんあふもろくおんあふもろく

十七

女角丈

おんあふもろくおんあふもろくおんあふもろくおんあふもろくおんあふもろく

七

戸を閉ぢりて物法に可なり所は白紙を巻く事其の初は上巻なり其の頭は
其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事
其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事

正月二日

芭蕉

其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事
其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事

○

其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事
其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事
其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事

やどわくく精下新しむ耳とてまうくかひあつて紙を
紙の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事

一 風鈴の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事
其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事

一 風鈴の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事
其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事
其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事其の巻末に封を施す事

酒をたき杯うしげ度と端とまきしむいさくはあつた不
まうに沙夜のかきうとせりきし
一正身なる親の自勢又しはえ中物あつしきい何せんは通
不仕いあや此ものこ何りもさしとまみしはき杯とくれ
ふりいはいさいとくくしき杯と後いれを急るる應てお
りいさいとくくし

不通仕すしくは候りあうくてあつた風後のかきけし
まきしやいむうの乞食うとまきうるい

二月十八日

出水様

とまみ

酒をたき杯うしげ度と端とまきしむいさくはあつた不
まうに沙夜のかきうとせりきし
一正身なる親の自勢又しはえ中物あつしきい何せんは通
不仕いあや此ものこ何りもさしとまみしはき杯とくれ
ふりいはいさいとくくしき杯と後いれを急るる應てお
りいさいとくくし

浦

浦

浦

この穀後の月には、
この時とて、大丈夫哉、
命を命とて、
さのみを、
すや、
あはれ

四月廿四日

小枝丈

少枝

○
は、
一、

かく、
え、
た、
さ、
あ、
天、

四月廿四日

小枝梅

後、
何、

わ枝燗

○
夕月と想つて薄くもたれに成りては、
かゝる百歩も歩くと、
い

稗の穂は、
い

穂の穂は、
い

め、
い

穂

男、
い

八月、
い

子、
い

い

○
居士秋の切糸、
い

中うま

浪化様

柳喜

○ 此の浪化様のかき書は、
いふに、此の浪化様のかき書は、
かき書は、
かき書は、

廿二

仁多事始

○ 昔、
仁多事始

○ 此の浪化様のかき書は、
かき書は、
かき書は、

柳喜

かき書の始

○ 又、
かき書の始

○ 此の浪化様のかき書は、
かき書は、
かき書は、

七

かき書

かき書

○ 此の浪化様のかき書は、
かき書は、
かき書は、

十九

自由のしほ

一層の雲より夕暮の影をいれ更なる大なることごとくしを、老翁の
まへへ増しおのむる御

十七日

晩の始

とまて

○

傘の影の移るをいれ夕暮の影をいれ帳の影をいれ
おもしろい夕暮の影をいれ夕暮の影をいれ夕暮の影をいれ

七日

夕の始

とまて

○

新美一升第の始の影をいれ夕暮の影をいれ夕暮の影をいれ

新一升の影をいれ夕暮の影をいれ夕暮の影をいれ

夕の影をいれ夕暮の影をいれ夕暮の影をいれ

○

新美一升第の影をいれ夕暮の影をいれ夕暮の影をいれ

夕の始

おもしろ

とまて

夕の影をいれ夕暮の影をいれ夕暮の影をいれ

○

夕上

夕の影をいれ夕暮の影をいれ夕暮の影をいれ夕暮の影をいれ

尋拂令入

身しを野木さの月さみし

走しを家々さきさぬ森のうらみ

古鹿やの物さしを越さしを森の花 世角

○

遊り入るわささしを海、遠る中、海草の濁るさし約米
トは短冊のほきやうぼりつれとニほささう初め
やういさんさあ本尺きくくへ生海うささう初め
叶あうし進みお何分とらんさくつあうりあうり
さいあお手治さうへんさくくくあさういさくささ
さすれ子葉飯と搦ん手りのさ
みはくをし徳くさういし又さうさくくあさうさくさ

あしいし

廿二

年月文

さき文

遊りささくさかつあうりあうりかーんり折のま散りさうのさ念
風斗る折の風は延引し

その家と信考の世ささうの家

ゆくまやまゆり魚は月ハ流

叶あうりしささし徳く延引し風はさうい徳くあうりさ
折あハ散りささうあうりさ

卯月廿二

さき文

風流文

○ 林うさういふ事多る月尺うさ
おしるの中へ雲くはまゝのまきして是れ中尺のうさ
おまき不しはまゝのしりふのまきおまきあつたうさうさ
さうは清海をまら本月初のうさうさうさうさうさ
まきおしるのまきおまきあつたうさうさ

十八日

枕書

ぬす文

○ ひとゆきお信を二三人と係り可なり好ましくいふ
あつめんやうさうさうさうさうさうさうさうさ
いさうお信は鯛豆茶碗に入まきおまきあつたうさうさ

ふし引合をまじらわしつゝおまきあつた

二日

七き紙

かおーやあお紙

○ 保生依ら夏之紙

おのるおまきあつたうさうさ

お将尼のあま紙

まきあつたうさうさ

おのるおまきあつたうさうさ

おまきあつたうさうさ

おまきあつたうさうさ

おまきあつたうさうさ

秋風文

秋風自白

おもひよきしつらけりてふあはれ
花のうや古くあはれあはれ

の上

とて

○

尾川方より字守もひよきしつらけりてふあはれ
はくは山崎又字守もひよきしつらけり

又

とて

三千里尾張大根のいふ

又

尾張一とめつらけりてふあはれ

尾川方より字守もひよきしつらけり

○

尾川方より字守もひよきしつらけり
尾川方より字守もひよきしつらけり
尾川方より字守もひよきしつらけり

尾川方より字守もひよきしつらけり

尾川方より字守もひよきしつらけり

とて

又

とて

尾川方

○

尾川方より字守もひよきしつらけり

梅のふりしけやうの木は梅の花
ひの枝はひの葉も花も一しりきりな木もあめり

廿一々

梅妻

左梅夫

○

空身院に下宿する上幸し舟中より延つふ象を引しり西渡
ひきしり入れたる船より歌をよみては治らう候しり下宿
多向はつ船より舟より候しり治らう候しり又内より舟の
中より又舟の中より舟より候しり治らう候しり舟の中
先娘と使は度毎に舟の中より候しり治らう候しり舟の中
候しり舟の中より候しり治らう候しり舟の中
候しり舟の中より候しり治らう候しり舟の中

廿一々

山向きゆ梅

とては

○

お使女上めりゆりゆり梅の花を引しり西渡
ひきしり入れたる船より歌をよみては治らう候しり下宿
多向はつ船より舟より候しり治らう候しり又内より舟の
中より又舟の中より舟より候しり治らう候しり舟の中
先娘と使は度毎に舟の中より候しり治らう候しり舟の中
候しり舟の中より候しり治らう候しり舟の中
候しり舟の中より候しり治らう候しり舟の中

廿一

とては

六月八日

松三ノ振

松三

○
りし四月廿五日又とあすを先大坂也と云ふ事
省所しす所

夏月七月十日の松三を運送する事と云ふ事
りし伊賀、遠南の松三と云ふ事
の勤つ家内も多しす事と云ふ事
中より多しす松三を運送する事と云ふ事
下りしと云ふ事

一 松三の事、長い事と云ふ事、秋三の事、松三の事、
りしと云ふ事、秋三の事、松三の事、

字をりしと云ふ事、松三の事、
りし、伊賀の事、松三の事、
事、松三の事、

三ノ松三の事、松三の事

きくつと云ふ事、松三の事

びつと云ふ事、松三の事

いささの事、松三の事、
りしと云ふ事、松三の事、
りしと云ふ事、松三の事、
下りしと云ふ事、松三の事、

子柳を足さし八柳海に思ふまじくわまふ人か
あつくと柳海地は係り勢をくちりしはる多候し

九月十日

松風稿

とまひ

○

此より入る海舟も舟多しそん候はゆりそん中へと一
所よりくわしり大廿二日の通るゝのへ入る古候は所
定よりいりしとよりくわしり内白くはしりし
入候と一

物候一や候はしりは月と也

いりしとよりくわしり百と命と合する候とよりくわしり
とよりくわしり

廿三日

松風文

とまひ

○

三月十日の候か上柳をわし三十日と是の候と百三十里以内舟
十三里かか四十里歩りは七十里とありし十四日

候の候七つ 瀬門 西河 晴吟 梓 有る 布引 箕面

古塚十三 通水候 赤塚 乙女塚 清盛石塚 忠度塚

敷盛塚 人彦塚 通事塚 松尾村内塚

越中前司盛俊塚 河原右郎兄弟塚 良將梅塚

能因法師塚

味六つ 琴引 臍味 ちりり味 岩や味 小併味

坂七つ 糖坂 ちりり坂 ちりり坂 宇津坂 ちりり坂 櫻尾味

不勤坂 小登坂

山崎らッ 小尺山 安藤嶽 古井山 三ツツ山

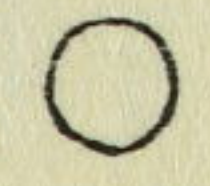
猪尾古山 金部古山

此の標の教川の敷名をいふ山はハキヨク

卯月廿五日

万葉 枕書

惣七橋



高く二葉の河原の山を吹くは 橋たつたかき
たつた念付の山

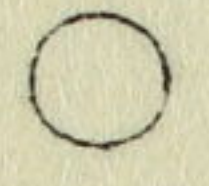
その中へ風は風し 俊きし 物たつた宗平と 新の上
京のまへし 宗平らつた山をたつた大葉の河原

つた橋をたつた 柳をたつた 山をたつた 橋をたつた
たつた 山をたつた 柳をたつた 山をたつた 橋をたつた
たつた 山をたつた 柳をたつた 山をたつた 橋をたつた
たつた 山をたつた 柳をたつた 山をたつた 橋をたつた

五月廿日

枕書

たつた橋



一 伴とあつた山をたつた 山をたつた 柳をたつた
山をたつた 柳をたつた 山をたつた 橋をたつた
山をたつた 柳をたつた 山をたつた 橋をたつた
山をたつた 柳をたつた 山をたつた 橋をたつた

一 宗平尾の標の山をたつた 山をたつた 柳をたつた
山をたつた 柳をたつた 山をたつた 橋をたつた
山をたつた 柳をたつた 山をたつた 橋をたつた
山をたつた 柳をたつた 山をたつた 橋をたつた

一 寺の起りて生れんか 魁うん

一 船のりし再會ふけりし力言は 孫松風子 冊八草子 夢りあけ
けんか 海より 一 口言ふと ころり

元禄七年十月

一 支考の 皮お 佛を 浮切 穿て くらん 此 毎 札 あり 虎の 佛
ハ 別 心 あり ころり ころり

大なる 浅水

支考の 衣 袴の 後の 字 首 あり 命 折 の色 ころり 首 字 部
跡 跡 あり ころり ころり 跡 跡 あり ころり ころり



送物 完

一 三日月 日 記

何 故 ころり

一 紫の 書 巾

同 所

一 埋 木

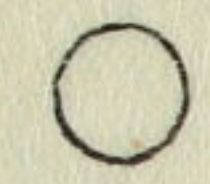
半 紙 方 ころり

一 新式 書 入

是ハ 松 風 ころり ころり 紫 字 あり ころり 本 宮 ころり ころり 青 紙 あり 支 考 ころり
ころり ころり

一 文章 及 紙 束

右ハ 松 風 方 ころり ころり 文章 ころり 半 行 ハ 支 考 下 紙 為 懸 繪 あり
ころり ころり



一 羽 羽 書 巾 あり 紫 白 紫 色 集 ころり 紙 入 公 公 羽 ころり ころり 遠 ころり
ころり ころり 松 風 ころり ころり 紙 入 あり
一 菴 美 の ころり 紙 束 の 白 引 紙 あり

一書今の序傳百人一書秘抄見の支那の可なり
元禄七年十月日
とて紙書

○
ゆえにその後訪念の可なり思ふに如何なるも又その便に如何なる
年と家々の新の臨終の可なり思ふに如何なるも又その便に如何なる
次々の後訪念の可なり思ふに如何なるも又その便に如何なる
すなり及右の道に如何なるも又その便に如何なる

十月十日

和書

和尾の山とつ燈

新益八條と骨と折と赤い

俳諧一葉集句合評之部

古學庵 併号
幻窓 湖中 編
坎窩 久藏 校

小と竹の枝あしきまふ小葉とすう何れをくわ
て葉あひしくと何れをけりていひ竹とさう何れを
あひあはしくと何れをけりていひ竹とさう何れを
さう何れをけりていひ竹とさう何れを
て二十番の葉の合を紙にのりて刀折紙の式に付て
あまの葉の合を紙にのりて刀折紙の式に付て
具の葉の合を紙にのりて刀折紙の式に付て

紅梅はけちやゆのいんふくる
此男子

右

蛇足

只分り梅をくものむや火休と
左の赤いんふくら大坂とや丸の甚金とくふ小舟
りれはれと
右梅を只分りくものむ火梅をくものには
赤くすし竹をくものむ梅の甚くすめい火梅の甚
白くすし竹をくものむ梅の甚くすめい火梅の甚
とくすし竹をくものむ梅の甚くすめい火梅の甚
はくすし竹をくものむ梅の甚くすめい火梅の甚

三右

左

くろやげく物家のけしむいさ
右勝

右勝

哉也

鼓くすし竹をくものむ梅の甚くすめい火梅の甚
た物家のけちやゆのいんふくる
くすし竹をくものむ梅の甚くすめい火梅の甚
鼓くすし竹をくものむ梅の甚くすめい火梅の甚
百姓の納米くすし竹をくものむ梅の甚くすめい火梅の甚
可也

左

行条母

さうし梅の甚くすめい火梅の甚

右勝

和正

鼓くすし竹をくものむ梅の甚くすめい火梅の甚

精進すまじし心もあらけしきよなるの心はじつとすまじし心も
いふはまじき心もあらけしきよなるの心はじつとすまじし心も
いふはまじき心もあらけしきよなるの心はじつとすまじし心も

右きく精進のらうまじし心もあらけしきよなるの心はじつとすまじし心も
右きく精進のらうまじし心もあらけしきよなるの心はじつとすまじし心も
右きく精進のらうまじし心もあらけしきよなるの心はじつとすまじし心も

守るはまじし心もあらけしきよなるの心はじつとすまじし心も

右

皆然るまじし心もあらけしきよなるの心はじつとすまじし心も

一友

貞子

右のりまじし心もあらけしきよなるの心はじつとすまじし心も
右のりまじし心もあらけしきよなるの心はじつとすまじし心も
右のりまじし心もあらけしきよなるの心はじつとすまじし心も

左

きやんゆえんまじし心もあらけしきよなるの心はじつとすまじし心も

正之

右

きやんゆえんまじし心もあらけしきよなるの心はじつとすまじし心も

志見

右のりまじし心もあらけしきよなるの心はじつとすまじし心も

左勝

珍くきつ多やちふし(花のえん)

宗房

右

きてくくく其くく雨おれ花くらと

宗房

左勝の枝をちふくくは先も他も八珠を他位の親くく
くくはけいあう右の甚くお雨おれまきくくく系おれや
とまん多れくく一白は任まきくくくはあつて其あつて
まうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
強めくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
まけくくくくくくく

十番

左持

唯ーきくくけあけんつくかのまきく

政定

右

ゆーきわ山の尾きハ多きやうめ

和久

左八日平陸の冬考の桐もまのいくく白の波ハ多親のま
なうくくくくくくく
おのくくハ多まきくくくくおつわの親くくくくくく
あれくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
考のまやうくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
結くめんくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

十一番

左勝

時き答うく唯ーくくくくくくく

吉之

はねをとりやめしむるはねのうけ

指盛子

たはらひのしほを伊とていふはたはらひの
あみ目とてわらわしあうもつとれしるる

ぬくまをいふは踊の拍をいふはたはらひの
んてさらばまきやよまきふらむはたはらひの
十とちぢ

左勝

月の舟やまのむらんどこつやまのうけ

信孝母

月の舟やまのむらんどこつやまのうけ

右

三竹

たのむらうはのむの書やむや寺やたか
あひししはのまきとあつとて光明遍照十方世界

のよんかたは若白とやとよ

たのむらうはのむの書やむや寺やたか
あひししはのまきとあつとて光明遍照十方世界
鬼のまきとあつとて光明遍照十方世界
船面つとれむとて光明遍照十方世界

十七和

左

ちよひの素とてやめぬるあひ

吉之

右勝

あひししはのまきとあつとて光明遍照十方世界

常新

左伊勢はお玉の海やみうらとて光明遍照十方世界

ぬの白紙のやまにまはせしむるしあつて
ねしよんはまのまにまはせしむるしあつて
よふまはまのまにまはせしむるしあつて
けしあつてまはまのまにまはせしむるしあつて

二十五年

左 掛

麻をいしむるや小野のまはせしむる

政輝

右

女又あや毛子毛子掛あや毛あつて

宗房

人の若白小野のまにまはせしむるしあつて
ものひしむるおほの物候しよんはまのまにまはせしむるしあつて
しむるむよくとる合されまはせしむるしあつて

とまをいしむるまはせしむるしあつて
とまをいしむるまはせしむるしあつて
ぬの女又あや毛子毛子掛あや毛あつて
き首先のまはせしむるしあつて
二十一巻

左

鼻毛

佐男麻のまはせしむるしあつて

右 掛

石口

みる麻やまはせしむるしあつて
麻をいしむるまはせしむるしあつて
とまをいしむるまはせしむるしあつて
けしあつてまはまのまにまはせしむるしあつて

今より先の昔よりとていふことありて大なるおぼや
かしきん

二十二番

左勝

ふやけく、右のまきうけ紅葉川

三本

右

みからぬてまきうけのしほ枝のたか

改是

たのり紅葉のまきうけの心まき

たのりうくひしうけのしほ枝のたか

まきうけのしほ枝のたか

右のまきうけのしほ枝のたか

大むらさきもや秋百里のたうひりえうてつめくふたぢ

をまきうけのしほ枝のたか
二十二番

左勝

まきうけのしほ枝のたか

餘林

右

まきうけのしほ枝のたか

改是

たのめれうけをまきうけのしほ枝のたか

通うまのしほ枝のたか

たのりうけのしほ枝のたか

なまれうけのしほ枝のたか

うけをまきうけのしほ枝のたか

二十方角

左 右

こころをいかにしめむるがごとく

勝云

右

こころをいかにしめむるがごとく

殊次

たのむことのみけいかにしめむるがごとく
くどいことなきればいかにしめむるがごとく
しるすことなきればいかにしめむるがごとく

たのむことのみけいかにしめむるがごとく
くどいことなきればいかにしめむるがごとく
しるすことなきればいかにしめむるがごとく

たのむことのみけいかにしめむるがごとく
くどいことなきればいかにしめむるがごとく
しるすことなきればいかにしめむるがごとく

二十七番

左

ゆき布の松の葉とていかにしめむるがごとく

正云

右 勝

義云

ゆき布の松の葉とていかにしめむるがごとく
くどいことなきればいかにしめむるがごとく
しるすことなきればいかにしめむるがごとく

ゆき布の松の葉とていかにしめむるがごとく

長室八歳次

庚申仲秋日

鼠寺江師傳次

田舎之句合

才一書

左 右

雲津くまをさへくさるるを紀へり

右

兼攝をし白鳥をよし世川に放りて

かき野人

矢乃のうはを流の二りてえくはくまをよし長き
まへ神皇の所をぬきやうくゆりくた見く不二のけ
き空紀くまをよし古く人春雪を獲りなまし紀
使ふふくやぬのう業攝をよし世川に白鳥を
放りてくまをよし世川の流をよし

才二書

そととて批定の批とて思ふ

中五

左持

地利程人ひさしや花あふ

農丈

右

梅枝より目を見せしむ

中人

地利をいひて花はほろけし程人深ゆ又目見しむの
巻のさくさくむやう上中管中の梅も尺重しむる作
下巻のあはれはあはれあはれとて言差ふ

中六

左

佐子いひてあはれあはれとて言差ふ

農丈

右持

高きうきくまをいひてあはれあはれとて言差ふ

中人

真子より先手吟人をいひてあはれあはれとて言差ふ
受の事能はれし人いひてあはれあはれとて言差ふ
う姑獲もいひてあはれあはれとて言差ふ
於指あはれあはれとて言差ふ
さうい道きとていひてあはれあはれとて言差ふ

中七

左

今よりかく浄瑠璃座のまきす

農丈

右持

何とてあはれあはれとて言差ふ

中人

まゝに置よくとけ付ぬるゝに相好空より持くるに中
の中をいひてきつゝ人より一箇才寺の入花の園白と
すんのきつゝよまゝにわらう仍以ま相織を結く定付る

才八く

左 勝

忠文

隆カレく^{そよや}勢破^{そよや}ほくま^{そよや}し^{そよや}等の戸々

右

忠人

時き 茶^{そよや}のうそ^{そよや}やき^{そよや}うし^{そよや}

まの度の花の念佛先殊持茶^{そよや}のうそ^{そよや}とよ^{そよや}行^{そよや}し^{そよや}て^{そよや}
あつて^{そよや}路^{そよや}の^{そよや}か^{そよや}よ^{そよや}う^{そよや}き^{そよや}の^{そよや}心^{そよや}の^{そよや}如^{そよや}き^{そよや}う^{そよや}し^{そよや}
とよ^{そよや}あ^{そよや}る^{そよや}や^{そよや}路^{そよや}ま^{そよや}し^{そよや}と^{そよや}し^{そよや}と^{そよや}し^{そよや}と^{そよや}し^{そよや}
との^{そよや}種^{そよや}の^{そよや}者^{そよや}の^{そよや}と^{そよや}し^{そよや}と^{そよや}し^{そよや}と^{そよや}し^{そよや}と^{そよや}し^{そよや}

可ナラコヤ

才九く

左 拈

忠文

聲の^{そよや}ま^{そよや}の^{そよや}子^{そよや}ま^{そよや}を^{そよや}し^{そよや}し^{そよや}と^{そよや}し^{そよや}

右

忠人

櫻^{そよや}の^{そよや}子^{そよや}苗^{そよや}種^{そよや}の^{そよや}如^{そよや}の^{そよや}秋^{そよや}の^{そよや}う^{そよや}り^{そよや}

聲^{そよや}の^{そよや}中^{そよや}の^{そよや}ま^{そよや}の^{そよや}如^{そよや}の^{そよや}如^{そよや}の^{そよや}如^{そよや}の^{そよや}如^{そよや}
う^{そよや}の^{そよや}如^{そよや}の^{そよや}又^{そよや}櫻^{そよや}の^{そよや}子^{そよや}苗^{そよや}の^{そよや}秋^{そよや}の^{そよや}う^{そよや}り^{そよや}
は^{そよや}上^{そよや}の^{そよや}う^{そよや}り^{そよや}の^{そよや}ま^{そよや}の^{そよや}如^{そよや}の^{そよや}如^{そよや}の^{そよや}如^{そよや}
し^{そよや}の^{そよや}如^{そよや}の^{そよや}如^{そよや}の^{そよや}如^{そよや}の^{そよや}如^{そよや}

才十く

左

忠文

氣をまきしと能きしとふんそ昔の甘きとつら
丸の月ハ佳き子ら句

多しの色や利休の目もよみおの能きとつら
似うよふや強しやをあそん甘えおの能きとつら
竹れと甘きの一滴もあそんおの能きとつら

才十九

左

如又

対る能きおの能きとつら

右勝

如人

木くしとありぬ増生の世目

わが三折の秋あるおの能きとつら
まきしと増生のつら見えとつら

才二十

左特

のこ

上りゆくそとへおの能きとつら

是の能きの能きとつら

右

や人

昔しよきいくおの能きとつら

隆山のくさくおの能きとつら
おの能きの能きとつら

才廿一

左特

如又

徳り能きとつらの能きとつら

右

如人

火煙のしほくおやきりしききをかき
 口切のしほくつりしききをかき
 飯の樂いなる焼助もや又火煙のしほく
 陽氣壯別夢歩大火燔燭又籍者味別夢蛇
 を以これをしほく燔燭のしほく
 三十四

中二十三

左 右

おねのしほくおやきりしききをかき

右

おねのしほくおやきりしききをかき

おねのしほくおやきりしききをかき

忠文

忠人

おのけしほくおやきりしききをかき
 身一人おねのしほくおやきりしききをかき
 さしほくおと又おねのしほくおやきりしききをかき
 おねのしほくおやきりしききをかき

中二十三

左 右

おねのしほくおやきりしききをかき

右

おねのしほくおやきりしききをかき

おねのしほくおやきりしききをかき
 竹松ほのかとんささしほくおやきりしききをかき
 おねのしほくおやきりしききをかき

忠文

忠人

ろくろとらひてうとましくく用たゆへ

中二十四

左 猪

魁山家く粉味也

如ん史

茶付のめらみそほきうとけり納豆のめ

右

家多家くみね

野人

二角程を〜味高き〜吟を飲く事

紫生葉の森の木より〜火のれく枯くなる葉の林に
から乾めくのみそ煮をへく乾坤を忘れらるは士無下
其用功と多ふあ〜ぬのひ貴家〜て多程を後
この作を告を〜をくよふ〜はむ志はあ〜之と

中二十五

左

農丈

家の蛤より湯をたぬのみそを煮をんよん志

右 猪

野人

ふろ〜手の志をきつ〜ぬき激推の
店番のらうけを煮の〜せんよ〜うさ〜ふろ〜手の
阿それお〜は是を影ます〜

棚之齋豆 柳青漫探毫判

言
船のあゝ木はさくらとて
とてはまの木の青くは
甘味のほくあつたを
あつた

秋風子

岩屋の句合

中一番

左 勝
まやうく八百屋の灯を
焚し

右

と引もお松の系此とてあつた
たの芳字八百屋の灯を
焚きしゆりしゆりしゆり
おらしゆりしゆりしゆり
日の光を引しゆりしゆり
かゝるしゆりしゆりしゆり
仍以たお松

中二番

左

左

里芋の長きうり畠中へはたしりやうんハ

右勝

羨ハらうくうらうてを捨降手自然生

里芋無きて之を以て山の暮自然其は預生の字の如く
んてハうくくくや但自然石自然木の影を以てしりやう
すいさうをよ上又字力ありて一のくくくみん信りさ

中十六

左勝

系信身をもくくく梅干の影けくくくもみり

右

乱風の信尺くくや梅干の青くも受ル

片の又字先改書あまの現子とて梅干の精をくくく出也
かの去大根を食くくく芳くくく影をくくくや丸のう破戒の信を
いりくくく未末柚くくくのせをくくくけ焦熱の苦みくくく柄味
晴の登りけくくくあくくくやくくくくくく信系毎寄の信了
殊勝すおわくくく信れ

中十七

左勝

暮山の雨 松茸のすくくくく

右

岩よりくくく木くくくけけ再子せら
きくくくく海苔山の向くくくめれくくく松茸のすくくく
けくくく信子の信りくく味涼くくくのくくく一信きくくく

あきれたる木うけの耳をかきく思ふ。その木下きき
もくもく付るまき

才十八

左 脇

もくもくを密柑とを柑の多し曰

右

水又粟こを清しととんよれハ

杵を密柑全柑の論ハ竹の中ハ竹をいふ中ハ密をいふ
ゆり数白の中ハ多逃げ白におひくは木園をいふんむ味ま
しハ濃栗の匂ハ栗をいふ水も清しととんよれハ
付れとていふゆりハ空栗ハいふはくは栗ハ方とていふは只
たのむを以新ひるよと様と定りぬ

才十九

左

街うきりの干瓢ハあきりいととんよれ

右 脇

いんし菜やのうすを瓜のいんしぬ

いんし菜はもとの然り情干瓢の多しとていふは秋
さうふれさぬとて干瓢むくといふ時ハ白の香をいふは秋
の白り冷きんとていふは又ハ木をいふは木の下を瓜と
いふは秋さぬとていふは秋さぬとていふは秋さぬとていふ
尺三新しとていふは

才二十

左 脇

續の原

判者四人

春 夏 秋 冬

素堂 調和 湖春 桃青

四季之句合

棋者

不卜 才丸 其角

一書

左 拵

藤茶

藤茶とて高士の法にやう塔の山

風水

右

藤茶とて高士の法にやう塔の山

松涛

方より高き樹ありて又山と云ふ所の不
二の後の一よりけりてゆへに高き樹と云ふ
尺の切字ありて又高き樹と云ふは高き加へ
尺の切字ありて又高き樹と云ふは高き加へ

左 勝

石

親しむに高き樹をかゝりて高き樹と云ふ

漢石

詩
是より先と集めしるるにふくむ
も喜秋をくちゆふ南行しるる
をさかんしるる牡丹の花を
さくしるる無くたすかれ
るるしるる心なきけかた
もことふ本なきしるる
あはれあはれしるる
樂子とてしるるもの
ともまはれしるるの
まはれしるるの
まはれしるるの
まはれしるるの
まはれしるるの



